鎧橋随想

絹と活性酸素

イトレン社長
富岡　俊造

活性酸素が人間の体内の蛋白質やDNAの狂いを起こして老化や病気の発現の起因になっている事はご存知の通りです。

毎日の食生活で体内の活性酸素を減らすにはビタミンA、C、E、B_2を多く含む食品を摂取するのが良いと言われています。一方、衣料の中では、活性酸素の発生を抑える所謂抗酸性の優れた絹製品が見直され、絹のもつ含硫アミノ酸やセリンが有効である事が判り、また他の天然繊維に比べ抗酸性蛋白質が桁違いに多い事が判っています。

肩こりの人に絹のタオルを首に巻いて寝る事を勧めたら3週間程で楽になったとか、膝の不自由な人に絹の膝当てを贈り調子が良いと喜んでいただいたり、前立腺肥大が心配の人に絹の越中褌を贈って調子が良いと知らされたりなどの例があります。

また、絹には水分の吸放湿性の優れた機能が有り、特にゴルフの時の下着に着用すると汗を吸い取り、外部に放出し、乾燥期には水分の放出を抑えて皮膚のカサつきを防ぎます。さらに、絹の蛋白に美白効果があり、シルクパウダーが化粧品に多く使われています。今後、更なる絹蛋白の研究で身体に有効な機能が見つかるでしょう。

ヨーロッパ体験

クレボ社長
今村　順樹

今年初めに代表取締役に就任し、「自分があって仕事がある」という考え方を社員に伝えました。仕事は大人がやるものであり、きちんとこなすのは当たり前。

しかし、そこには自分と他人の価値観や権利、自由を同等に尊重し合う、ある程度の個人主義が働くだろうと考えています。

このような価値観が自分の中で醸造されたのには、若い頃経験した欧州での生活が背景にあるのでしょう。

大学を中途で辞め、パリに渡ったのは、その頃に漠然と胸の中で想い描いていた異文化へのあこがれからでした。そこでは観光ガイドをしながら生活を維持しましたが、今度はスペインへの憧憬が頭をもたげてきました。

スペインでは露店商をして暮らしました。ラストロと呼ばれる蚤（のみ）の市やサン・フェミルンといった牛追い祭りでは、路上に陣取って自作のペンダントや水中花をならべました。

今で言うフリーターですが、商売は順調で、このまま暮らそうかと思ったほどです。

しかし26歳の時に転機が訪れ、業界入り。今日に至っていますが、当時の何物にも代え難い経験は私の中で生き続けています。

携帯電話

アイメックス
専務取締役
神谷　文男

皆から「いまどき白黒画面の携帯電話を持っているのは、化石に近い」と言われ、この度カラー画面の携帯電話に交換しました。

取扱説明書は何と503頁にわたる膨大な物で、客を馬鹿にしていると思いつつ、とにかく読まないことには使い勝手がわからず昼夜、土日を返上し読み終えましたが、いざ使うとなると何のことやらさっぱり解らず、ひたすら発信受信の電話機能のみ使用しています。

子供の高額な使用料に文句を言いつつ、子供や若い社員はまったく説明書も読まずいろいろな機能をすんなりと活用し、その頭の柔軟性については感心せざるを得ません。自分が少々老いたのかなと思います。

ビートルズが受け入れられ、長髪が受け入れられ、茶髪も違和感がなくなり、説明書も読まない若者がいて、ものの見方や考え方は日々変化しているのを痛感し、加速度的に変化する業界についてゆけるかなと少々心配になってきました。

「昔は」とか「若いころは」という言葉が出るのは老いの始めといわれますが、携帯電話も仕事も「何でもまずやってみよう」の精神でもうひと頑張り。

江戸しぐさ

三晃商事取締役
管理本部長
近藤　正弘

江戸の町には、武士をはじめ全国各地から言葉・風俗・習慣の異なる人々がおおぜい集まった。文化・文政のころには、人口100万人を超える世界屈指の大都市に発展した。

「江戸しぐさ」とは江戸の町で皆が円満に共生するための「身のこなしや考え方」のことである。商人を中心に町衆の英知を傾けて工夫し生みだされ、江戸の「繁盛しぐさ」として伝承されてきたという。

雨のしずくがかからないように互いに傘を外側に軽く傾けあう『傘かしげ』。狭い道路で肩がぶつからないように互いに肩をさっと引く『肩引き』。駕籠に乗れる身分になっても、目的の家の少し手前で止めて、乗りつけるようなことはせず謙虚にふるまう『駕籠とめしぐさ』。

とっさの思いやりや相手を気づかう「江戸しぐさ」は、江戸商人なら誰でもが身につけていた。瞬間的に言葉づかいや顔の表情、身のこなしなどの形としてあらわれ、エチケットやマナーの領域を超えるものと、「江戸しぐさ語りべの会」を主宰する越川禮子さんは伝える。

この伝統ある町で商いをするものとして、これを受け継ぎ、次代にバトンをつなぐ大切な使命あることを自覚せざるを得ない。

拝見・石見焼　松渓山窯
兄の遺作に心癒やす

三晃商事副会長
山本　尚之

松渓山窯の兄梅生氏の作品

山本さんの生家は代々石見焼の窯元である。観光地図を開くと、島根県温泉（ゆの）津（つ）温泉のそばに「松渓山窯」と記されているのがそれだ。

「父の代まではマルモノと称して水がめ、すり鉢、こね鉢など日用品が主体でしたが、兄が4代目を継いでからは民芸品や菓子器、茶器、花器に替わりました」。兄梅生氏は変り辰砂（しんしゃ）という独自の手法を編み出した。

辞引には「辰砂　陶磁器で、銅を発色剤として高温で焼成して形成された鮮紅色のガラス質の膜」とある。

梅生氏が開発した変り辰砂はこれに一工夫加えたものだろう。梅生氏は河井寛次郎や浜田庄司とも交流があった。

松渓山窯のルーツは安政2年（1855）、豊田竹三郎というひとが始めたもので、近くに良質の粘土を産出することから隆盛をたどり、温泉津港から北海道、北陸、九州へと積み出されていった。明治時代に入り、山本家が松渓山窯を継承する。

山本さんは子供のころから粘土に親しみ、父親のそばで見よう見真似で土をこねていた。高校を卒業してからは陶芸の道を志したが、陶芸の世界の厳しさに耐えかねて、20歳の時、兄に無断で東京に出た。いまも帰郷した時は土をいじるが、「兄が一昨年亡くなり、後継者がいないため、松渓山窯も4代で終わることになりそうです」とちょっぴり淋しそうだ。

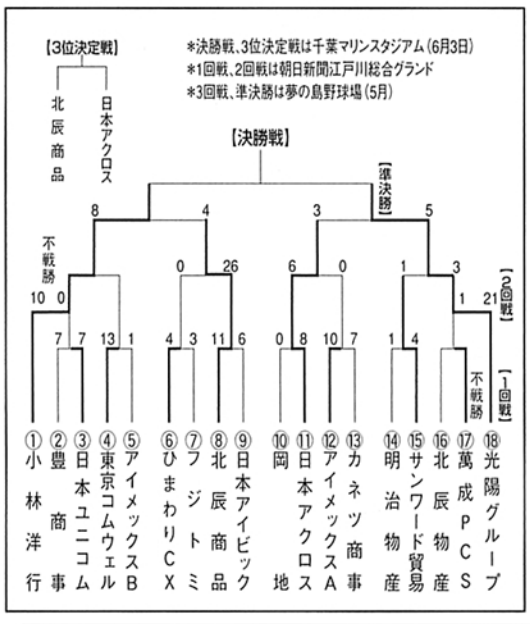
山本さんの部屋には梅生氏の作品が一杯ある。山本さんが社長になった時、兄から贈られたものや、兄にねだって格安で譲り受けたもの等々。松渓山窯の特長は、石見焼の伝統を受け継いだ「強く優美な流線と素朴さを基調にして、人の心に残る落ち着いた色合い」にある。

山本さんは折にふれ、木箱を開けては松渓山窯の流れるような線と光沢に兄を偲び、心が癒されるという。今年は梅生氏の三回忌に当たる。お盆には帰郷し、松渓山窯に挑戦するはずである。

決勝戦は前年と同じ顔合わせ
商品取引員親睦野球大会

第12回商品取引員親睦野球大会（日刊工業新聞社主催）は18チームが参加、4月12日から開催された。1回戦では、豊商事対日本ユニコムが時間切れとなり、審判判断によって両監督の了解のもとジャンケン、日本ユニコムが勝ち、北辰物産対萬成PCSでは北辰物産欠場による不戦勝の〝珍事〟があった。

結局、決勝戦は（6月3日）小林洋行対光陽グループで前年と同じ顔合わせとなった。



◆事務局だより◆

1面および3面にも掲載しておりますが、一般投資家および潜在投資家を対象とした『商品先物なっとくセミナー』を全国4地区5会場にて開催いたします。開催の都度お知らせいたしますので、会員各社におかれましては、委託者および見込客の皆様に対しご案内いただければ幸甚です。

証言・戦後先物史
ハマイト奮戦記（2）

元横浜生絲取引所理事長　松村　千賀雄

暴騰・暴落を繰り返す

横浜商取があるシルクセンター

――昭和62年4月にかけての生糸相場大暴落の直後に理事長に就任されましたが、その後も相場の暴騰、暴落が目立ちました。

松村　日本の繭・生糸生産の急減、中国生糸の輸入遅れで大暴騰の素地が作られ、平成元年（1989年）から2年にかけての相場はまれにみる狂乱ぶりを示しました。

当時の土地ブーム、財テク心理が絹にも及んで、大衆投機筋ばかりでなく、問屋も機屋も競って生糸の入手に奔走し、仮需要が盛り上がりました。その結果、蚕糖事業団の積年の大量在庫、10数万俵（1俵60キロ）があっという間に1万俵台にまで激減し、生糸相場は6月に当限で1キロ1万8、000円台、先限で1万9、000円台の史上最高値を付けました。

――だが、シルクのバブル現象の終息も早かった。

松村　絹の最終需要が特に増えたわけではなく、生糸相場は平成2年9月には1万1、000円近くまで暴落、実需不振は深刻でした。

暴騰時には、行政当局の強い要請もあり、各種規制を強化、自由な価格形成を取引所自らが束縛せざるを得ませんでした。商品取引員、委託者に協力を依頼しましたが、市場は萎縮し、取引人気は離散しました。

昭和63年のハマイトの出来高は百万枚に達しましたが、3年後の平成3年には約27万枚と、4分の1に激減、赤字経営を余儀なくされました。

平成5年にも大暴落があり、日本の蚕糸業、取引所は生き残れるかどうかの角番に追い込まれました。

――打った手は。

松村　一番やらなければならなかったのは取引所経営の基本、財政基盤の確立です。商品取引員、取引所、職員の3者に意識改革をお願いしました。実態を知ってもらうことと、スピーディーに能率的に業務を推進することです。最低ラインの収入を確保するため、会員には会費の負担増を頼み、出来高を伸ばすために手数料は思い切って低価にしました。

東京の商品取引員の会社を訪ね回りましたし、地方に行ってハマイトの存在認識を訴え、実業の人に協力を要請しました。取引所の運命を左右する局面にぶつかって、会員各位の英知により難局を切り抜けたと思っています。

（つづく）